

西山卯三論—政策としての建築

A Study on Uzo Nishiyama —Architecture as A Policy

建築デザイン分野 西村唯

西山卯三は、どのようにして建築家と国民の隔たりをなくし建築を皆が享受できるものにしたのか。レクリエーションに着眼することで、西山に一貫する手法を明らかにする。西山は、国民とのコミュニケーションを通して住居からまちづくりにわたる生活空間の創造をした。西山は、誰もが理解できる「共通の言語＝愛着などの概念」に依拠してコミュニケーションを創出し国民に空間を与えた。まちづくりにおいては、コミュニケーションを通して国民と共につくる方法論を提案した。

How Uzo Nishiyama did remove a distance between architects and people, so make people be in architects?
The purpose of this study is demonstrating the way by directing my attention to his theory of recreation. His consistent methodology is realizing it by communication having a general idea that everyone understand from house to city planning. In city planning and preservation of cultural assets, he thought communication as an important element.

1. はじめに

1.1. 研究の背景

研究者・西山卯三(1911-1994)は、戦前に大阪で生まれ、生涯関西という地で建築の研究をした人物である。研究テーマは、庶民の住宅研究から始まり、農村研究観光レクリエーション、まちづくり、国土計画など多彩であり、計画の対象とするものも住宅から団地、まち、国土へと移り変わる。西山は、自らの建築理論を、国家に協力する道具にすることもあれば、武器にして戦いを挑むこともあった。そのように、西山の研究者としての立場は揺れ動くが、まなごしの先にはいつも「国民」がいた。1940年代において「建築家」とは「国民」にとって遠い存在であり、西山はそこに問題意識をもち、「型」計画理論を核とするマスハウジング・システムに取り組み、それ以降、多岐にわたるテーマに取り組む。西山は、研究者人生を通して、「建築家」と「国民」を繋ぐ架け橋となりたかったのではないか。西山卯三という一人の研究者のしたことを明らかにすることは現在の課題でもある「建築家」と「社会」の間にある隔たりを紐解く手がかりとなるであろう。

1.2. 研究の目的

西山の没後、門下生による業績研究が進められてはいるが、西山の研究者人生を通して語ったものは少なく、それぞれの西山像には一貫性がない。西山の研究は「食寝分離論」で頂点を極めたと指摘されることも

少なくないが、本当にそうだろうか。本研究では、西山のレクリエーション論に焦点を当て、西山の文献や計画案を考察する。西山が変化する社会の中で、何に問題意識をもち、どのように論を発展し、それをどのような提案に適應させたのか、そして、どのようにして「建築家」と「国民」と繋いだのかその手法を明らかにすることを本研究の目的とする。

1.3. 本研究の位置付け

西山のほとんどの計画案にはレクリエーションのための空間が設計されていること、また実作においてもレクリエーションのための施設が多いにも関わらず、既往研究ではほとんど扱われていない。

『西山卯三の住宅・都市論 その現代的検証』では、第3章で構想計画、第4章で景観論についてそれぞれの分野の専門家により詳しく論じられてはいるが、他の計画案との関連性や共通点などは述べられていない。『日本建築家山脈』では、京都大学で西山がどのような影響を受けたのかは述べられているが、その後の提案への連関は述べられていない。『群像としての丹下研究室』では、当時の建築界の潮流や社会との関係をふまえて丹下と対比して西山についても考察しているが、住宅政策と万博のみである。以上のように、西山の研究者人生を通じて論じたものはない。本研究では西山のレクリエーション論に着眼し、西山の1937年から1970年までの論文や計画を考察することによりその

提案や方法論に特異性を見出すものとする。

2. 西山卯三の思想形成の背景

1911年（明治44年）、西山卯三は大阪・西九条安治川沿いの鉄工所の三男として生まれた。西山一家の住む西九条は、重工業中心の工場地帯として発展した工場と長屋の密集した町である。西山は幼い頃から労働者や庶民の住む長屋や裏路地の佇まいや生活に触れた。

小・中学時代には、学校で徹底した天皇教育を受けるとともに、好況・不況に煽りを受ける工場労働者の苦しい生活を間近に見た（文献14）。

1930年、西山は京都帝国大学工学部建築学科に入学する。京都帝国大学の建築教育の特徴として、建築史講座をいち早く設置したことが挙げられる。西山は、古社寺の修理保存に実績のある武田五一と天沼俊一から古社寺と現代日本建築の両方を地続きで学んだ。¹

また、西山は1930年に建築学科に入学した学生によるクラス会のdezamでも中心的なメンバーとして活動した。会員は15名で、宣伝・読書・写真・構造部が設けられ、機関誌『dezam』の発行や、バウハウスや住宅問題の研究をするなど学内の活動のみならず、他大学との交流もあり、共同制作や建築展覧会を開いた。この中で、西山は建築論・建築芸術理論・マルクス主義理論などへの関心とともに集团的・民主的な設計作業のあり方を知ることとなった（文献24）。

3. 西山卯三の定義する「建築家」

西山の「建築家」の定義は時代と共に変わる。1937年、日本の建築家の立場の弱さを批判したブルーノ・タウトの『日本文化私観』に対して、西山は日本の建築家の現状とその特殊性を示して異論を唱えた「我国建築家の将来に於て」を発表した。この中で、西山は、建築家とは、公共建築を設計する官僚技術者のことであり、自由建築家（アトリエ建築家）とはエピソードの一つにしか過ぎず、日本では一般的な「建築家」とは言えないと主張する。1941年、住宅の質の規定をいかにして決めるかを論じた「住宅の質について」の中で、西山は、建築家には、「一般の建築家」＝「官僚技術者」と「我々」＝「住宅営団の技術者」がいると言う。もどちらも国の機関であるが、国民住居^{注1}をつくる仕事を“聖業”と述べており、住宅営団のことをより重要な建築家の仕事であると位置付けた。論文の内容は建築生産の方法論が中心であり、西山の関心も方法論であったと考えられる。

1955年、住宅政策の破たんとそのに伴う国民の生活の破たんについて論じた「住宅問題と建築家」の中で、西山の考える建築家とは、アトリエ建築家と行政の建築部門の技術者であった。「住宅問題を解決するのが建築家の仕事」と述べており、西山は行政部門の技術者を建築家と定義する。建築家は国民の生活改善のための闘いを援助し、奉仕することが仕事であるということと同時に、その立場の弱さも強調して述べられて

	年	種類	題名	著者
1	1941	論文	住居の質において	西山卯三
2	1942	論文	生活の構造と生活基地	西山卯三
3		コンペ	大東亜記念造営物	西山卯三
4	1943	論文	大東亜聖地祝祭都市計画覚書	西山卯三
5	1957	計画	香里団地計画	西山研究室
6	1960	講演	構想計画Image Planning	西山卯三
7		論文	レクリエーションのための国土計画	西山卯三
8	1961	論文	観光開発の基本問題	西山卯三・住田昌二・片寄俊秀
9	1963	論文	都市開発の文化財の保存 一都市における歴史的遺産の保存は開発的保存でなければならない一	西山卯三
10	1964	計画	京都計画	西山研究室
11		論文	文化財の近代化とは一『京都タワー』論争によせて一	西山卯三
12	1965	評論	構想計画を！一文化財都市の開発計画一	西山卯三
13		書籍	住み方の記	西山卯三
14		論文	地域空間に置ける建築的創造課題	西山卯三
15	1969	書籍	住宅計画	西山卯三
16	1967	報告書	日本万国博覧会会場基本計画	日本万国博覧会協会
17	1970	評論	お祭りひろばの建築設計	上田篤
18		評論	万博会場計画：調査から企画へ	西山卯三
19	1972	書籍	国土の構想 21世紀の設計4	関西グループ
20		書籍	人間と生活 21世紀の設計1	関西グループ
21	1978	書籍	地域空間論	西山卯三
22	1980	書籍	建築論	西山卯三
23	1983	書籍	建築学入門一生活の探求（上）	西山卯三
24		書籍	戦争と建築一生活の探求（下）	西山卯三
25	2007	書籍	西山卯三の住宅・都市論 その現代的検証	住田昌二＋西山卯三記念すまい・まちづくり文庫
26	2012	書籍	群像としての丹下研究室	豊川斎赫

【本研究で扱うレクリエーションに関する文献】

おり、西山は建築家の限界を感じていたと考えられる。

1964年、高度経済成長期の日本の建築家の現状を論じた「日本の建築家層とそのイデオロギー」の中で、西山は、建築家の職能のひろがり述べ、明確に定義をしていない。建築家とは、建築創造の仕事に頭脳労働で参加している人や都市計画に関わる人も含む。

建築家とは、1941年には国民に住宅を供給することが仕事であるが、1955年には住宅問題を解決するために国民とともに闘うことが仕事と定義されている。1964年には、建築家の職能のひろがりが見られ、建築創造に関わることであれば誰でも建築家であると定義されている。また、行政（国家機関）の建築部門の弱体化がみられた。

4. 西山卯三の定義する「国民」

西山の「国民」の定義は時代と共に変わる。1941年、西山は住宅営団に在籍していた時に国民住居^{注1)}の方法論を論じた「庶民住宅の建築学的課題」を発表する。この中で、西山は国民を庶民と一般都市勤労者、労務者^{注2)}という階級に分け、その中で、国民を都市に住む都市勤労者及び労務者と定義した。

1955年、西山は住宅政策の破たんとそれに伴う国民の生活の破たんについて論じた「住宅問題と建築家」を発表する。この中で、西山は国民を支配階級と対峙する存在として下層勤労大衆と定義した。

1964年、西山は京都タワー建設の反対運動とそこから発展して市民参加のまちづくりについて論じた「文化財都市の近代化とは一『京都タワー』論争によせて一」を発表した。この中で、西山は国民と同等の意味で市民という言葉を用いている。国民（市民）は、建築家や行政と対等にまちづくりに参加する存在と位置付けられている。

1955年までは国民とは労働者のことであり、その住環境の悪さを問題としていたが、1964年には、西山は国民を労働者や支配階級などの階級で呼ばなくなり、国民とは、市民の集合体であると位置付けられている。

5. 西山卯三のレクリエーション論

西山は、1960年「レクリエーションのための国土計画」の中で、レクリエーションのことを「一日のうちで「労働」と「睡眠」の目的以外につかわれる、元来文化的創造活動につかわれると考えられてきた「余暇」を利用して行われる活動であり、それは労働と共に人間生活を豊かにし、社会の創造的發展をおしすすめる人間の能力をつちかかってきた生活の重要な部分である。」と定義した。西山は、人々の生活における余暇と休養は、「ねる」「たべる」といった休養的・補給的なものと「スポーツ」「学習」といった積極的・放散的な

ものものを両端として様々なものにわかれるとし、以下の5つに分類した（文献20）。

- ① 慰和的…肉体的、精神的に最も抵抗の少ない消費的娯楽。現実が苦しいときは逃避的なものに向かう。
- ② 転換的…気分を転換させてくつろぐ。なんでも良いが若干興味をつなげていけばよい。
- ③ 補足的…自分の労働生活の生活環境に欠けているものを充足しようとする。「やってみる」型。
- ④ 準備的…自分の労働生活の関連そしてその周辺をひろくあるいはそのものをもっと深く極めておこうとする。
- ⑤ 追求的…必ずしも労働生活とは関係ないが、ある一つの事に興味をもち、極端に言えばそれに生きがいを見つける。

日本の労働者階級のレクリエーションは①②が圧倒的に多いが、生産力と生産関係の発達により④⑤が増加すると西山は推測していた（文献7）。

6. 計画案にみられる共通点

レクリエーションのための空間が設計されている計画案を考察し、共通点を見出す。

(1) 祝祭都市

「祝祭都市」とは、1942年の太平洋戦争中に建築学会主催の「大東亜建設記念造営物」というコンペで西山が提案したものである（文献3）。東アジアの諸民族と日本国民が集まり、互いに交流をする広場をつくることを計画の主旨とし、西山は、奈良県橿原市にある藤原宮跡に、スポーツ競技や芸術・文化の交流、学術研究の交換、レクリエーションなどを目的とした全国的・国際的センターを設計した。祝祭都市の中心には戦死した兵士を称える「忠霊塔」をつくり、祝典祭場・スポーツ競技場・文化中心・錬成施設を周りに配して球心的構造をもつものとした（文献4）。

1940年、日本では西暦紀元前660年の神武天皇即位を祝う壮大な国家的祝典が政府内外の人々により広範に行われた。それに伴い日本の内地の人々だけでなく、外地植民地の日本人移民や地元民、さらには外国の住民の中で、史跡観光ブームが起こっていた。特に神武天皇即位の場とされた奈良県橿原神宮は1940年代において日本最大の観光地であった。²

西山は後にこのコンペを振り返り「どこにその立地を求めるか。神話時代の由緒を求めるといった考え方もできる。（この辺になると戦前の「皇国史観」の教育を受けた影響が俄然出てくる）」と述べている（文献25）。

以上から、西山が、人々の交流の場として藤原宮跡を選んだ理由は、奈良県橿原市で即位した神武天皇という当時の日本国民が共通にもっていた共通の概念に

依拠したためだと考えられる。

(2) 香里団地計画

香里団地は、大阪府枚方市にある団地で、1956年に日本住宅公団が京都大学西山研究室に開発の基本マスタープランを委託した。

共働き世帯を対象としていたが、通勤時間の不利を補うために、西山はレクリエーション空間の充実を試みた。団地外の人も使用できる多様な公共施設と乳幼児施設の充実が特徴としてあげられる。特に、400戸に1カ所設けられた乳幼児施設はこの団地のコミュニケーション創出の役割を担っている。幼稚園と児童公園を総合して児童センターを設け、近接したところに託児機能をもつ集会所と商店を配置する。これにより居住者と集会所が身近なものとなり、子供を通じての近隣交際が生まれ、かつ日常生活の利便さが確保され、コミュニティ・センターとしての機能が発揮できる。そして、これらの分区中心を緑地で結び合わせて開放性のあるものにする事で、居住者にとってより身近なものになると考え、出来るだけベルト状に緑地帯・プレイロットを設置している（文献5）。

このように、香里団地計画は、こどもを起点として住民同士のコミュニケーションが生まれるように計画されており、西山はこの計画で住民の“こども”に対する共通の「愛着・愛情」という概念に依拠してレクリエーションの空間を設計したと考えられる。

(3) お祭り広場

「お祭り広場」とは、1970年に大阪で「人類の進歩と調和」というテーマで開催された日本万国博覧会の基幹施設の一つである。西山率いる京大グループは、1965年に万博協会から会場計画の基礎調査を委託され、会場の基本計画と第1次、第2次マスタープランまでの計画をした。（文献16）

西山は、「人類の進歩と調和」というテーマから、現代のようにコミュニケーションの技術の発達した時代において、万博で「多くの人々が一カ所に集まってものをみなければならぬ」理由を「人間の直接のコミュニケーション」の為だと見出し、それが「都市の本来の意味」であると考えた（文献18）。会場周辺計画のみならず、会場構成の中に、新しい都市の形態、人類の生活空間の未来像を示すモデル「未来都市のコア」をつくり、このコア空間で人々の顔と顔を向け合った直接の交流と交歓を実現するために、15万人の「お祭り広場」をつくることを提案した（文献17）。

西山は、タブラ・ラサ^{注3)}の状態からコミュニケーションを生み出す方法として“お祭り”と“広場”の二つの概念を拠り所にした。西山は、メーデーへの参加や中国旅行時の国慶節の祝典の経験から“広場”が都市にとって重要な意味を持つと感じていた（文献

26）。また、“お祭り”は、洋の東西を問わず、古代は大衆を集めたイベントが祭事（まつりごと）となり、これが政事（まつりごと）の出発点であるように、昔から世界共通のイベントであり、みんなが共通にもつ概念である。³西山は、コミュニケーションを創出するために全人類の共通にもつ文化的背景である“お祭り”に依拠して設計をしたと考えられる。

三つの計画に共通することは、コミュニケーション創出のために、西山は誰しもがもつ“愛国心”（＝神武天皇）“愛情・愛着”（＝こども）“文化的背景”（＝お祭り）という概念に依拠して設計をしたことである。言葉がなくても共有できる概念を、西山はコミュニケーション創出とそこから発展するレクリエーション空間の創出のために用いたと考えられる。また、もう一つの共通点として、具体的な設計の手法がコミュニケーションの生まれる空間を緑地などで繋いだことである。人を流し、そこからコミュニケーションを広げ、さらに派生するように設計されている。

西山は、レクリエーションのための空間を設計する時には、誰もがもつ共通の概念をその空間の中心におき、動線で繋ぐという手法を用いたと考えられる。

7. 西山卯三の保存論

7.1. 観光とレクリエーション

西山は、レクリエーションを観光レクリエーション、保存論にまで展開させた。多くの観光学者が観光資源と人文資源に大別する手法で論じてきたと指摘される中で、西山は観光資源を旅行者と観光地を結びつける観光対象としてだけでなく、地域空間における観光行動の因子として捉えた。西山の観光資源とは、私たちの生活環境と、それに加えて文化財や自然景観を観光資源の重要なものとして捉えていた（文献8）。

7.2. 開発的保存

1963年、西山は「都市開発と文化財の保存—都市における歴史的遺産の保存は開発的保存でなければならぬ—」において、文化財や景観を壊す「開発」のあり方を批判し、「開発的保存」という保存のあり方を提案する。「開発的保存」とは、「都市における歴史的遺産の保存は、単に残す、保存するというだけではなしに、前向きに生かしてのこす」ことであり、「国民に支持された創造的な計画をもった開発のことである。」そして、そのためには「現在おこなわれているあらゆる種類の「開発」と対決し、本当の意味の建設的開発をうみ出すため、国民の力を集結しなければならない。」と西山は述べている。

西山が「開発的保存」を主張する理由は、当時の日本の文化財保護法^{注4)}では、現物をそのまま残す以外の方法は考えられておらず、西山はそのことに対して、

以下の三点を通じて都市社会全体にも損失をあたえようと考えていたためである。

- ① 建物の適切な修理・復元などのための出費がその負担区分の点で大きな問題をはらみながら当然必要とされること。
- ② その居住者・所有者が求める建物の自由な利用を制限し、さらにはその管理を義務づけられる、あるいは不利不便な生活を強要すること。
- ③ 保存するための地域の自由な新陳代謝・都市の合理的な発展がはばまれること。

この損失は、関係者の犠牲的な強力をのぞまねばならないものをもっており、単に経済的な数字で計算される以上のものであるため、その事業の意義に対する広範な人々の支持がなくてはならないと述べている（文献9）。

「開発的保存」の背景にはレクリエーションの思想がある。文化財とは、我々が後世の人々に伝えるべき貴重な財宝であるが、建物・建物群・景観などであるため、それらは目で「みる」ものとしての価値が主である。その文化財が私たちの生活と関わりをもってくる主要な過程は「みる」ということを通じてであり、文化財の保存の問題もこの「みる」という過程を中心に考えてゆかねばならない。「観光」とは日常を離れたレクリエーションとみなせるが、現在一般に行われている見物・遊覧・遊興・旅行といった形でとらえられているもの以上の内容と形態を将来大きく展開しなければならないことが予想される。こうした観光レクリエーションの展開の中に文化財の保存とその用途転換が位置付けられねばならないというのが西山の論である（文献14）。

「開発的保存」は、観光レクリエーションと文化財の保存の両方の側面をもっている。文化財を用途転換により私たちに身近なものに変えることで、過去（その文化財をつくった祖先や技術、文化等）とコミュニケーションを生み出し、学ぶ観光レクリエーションとも考えることができる。また、保存論の観点で言えば、そういった観光レクリエーションを通して文化財を保存ができるという利点もある（文献9）。

このような西山の保存のあり方は、古社寺の修景保存に新しい道を開き、京都大学時代の師である武田五一と天沼俊一の保存修景論を乗り越えたとも言える。

7.3. 構想計画

(1) 構想計画とは

1960年、東京で開かれた世界デザイン会議で西山は「構想計画」を発表する。構想計画とは、地域空間のような巨大なひろがり多様な要素をもつものに対して、現実にある矛盾を一つにまとめ、想定される未来像のイメージを目に見える形で具体的に描き、その計

画が誤りを含んでいる場合に生じる「地獄絵」をも書いてみせるというものである（文献6）。「地獄絵」とは、西山の造語であり、政府や資本家たちによって強引にすすめられている開発計画や政策が、そのまま実現されるとどのような状況が生まれるかを国民に示すために、的確に予測し、明確な形で表現したものである。

この「構想計画」のねらいとは、住民にあえて思い切った提案をすることにより、人々にまちや計画について考えるきっかけをあたえ、「構想計画」への関心をもってもらうことである。西山は「構想計画」のことを「形のマスタープラン」と述べており、まちづくりの方法論としての有用性を主張している（文献19）。

(2) 京都計画

「京都計画」とは、1964年に京都大学西山研究室が発表した京都の伝統の保存と開発の問題に対して取り組んだ計画である。京都計画は、A.部分計画（現実計画）とB.地区計画（指導計画）とC.全体計画（構想計画）の三つの部分からなる。C.構想計画は、「空間的ビジョンは現在の体制の下に都市の現実の発展がみちびく都市の矛盾を予測し、それを空間と形の上からあばきだし、指摘するという意味を持つものでなければならない」として以下のテーマをあげている（文献10）。

- ① 「文化財都市」としての京都の保存と開発のあり方
- ② 高密度居住形態の創造

① 自動車化への警告およびこれにかわる交通体系と都市形態

この計画の特徴は、自然環境や文化財の保存のために、その対比として稠密居住地域を設定していることである。「積層住宅」はその具体的な集合住宅体として構想されたもので、この主張の核心は、自動車の増大や業務ビルの圧力によって人が都心から閉め出されていく事態に対して、その流れを退け都心を人々が高密度に居住する地域としたことである。そして、交通輸送体系を地下鉄、モノレール、リフト等で装置化し、都市的な稠密な居住施設の体系を都市に組み込み、ゆとりのある公共スペースをもつコンパクトな居住ブロックとして構想されている（文献25）。

「開発的保存」も「構想計画」もまちづくりの方法論として提案したものである。西山はレクリエーションを用いることで、住民の参加を促したと考えられる。

「開発的保存」は、既存のものを「みて」「学ぶ」レクリエーションであり、「構想計画」は、既存のまちを将来どのような姿にするかを考える「する」レクリエーションであると言える。「開発的保存」は、住民がもつ“文化財（価値あるもの）”という共通にもつ概念をレクリエーションと結びつけて保存のあり方を提案した。「構想計画」は、市民の誰にでもわかる共通の言語としてマスタープランの代わりに「構想計画」を市民に

提示し、市民が批判（＝コミュニケーション）しながら討議をすることでまちづくりに参加させようとした。

8. 結論

西山の考える「建築家」と「国民」の定義とは、1941年には建築家は国民に住宅を与える立場であり、1955年には建築家は国民と共に闘い、奉仕する立場であり、1964年には建築家と国民は対等であり、協同してまちづくりをする関係であると述べられている。

そのような変遷の中で、西山の「建築家」と「国民」をつなぐ手法は、コミュニケーションを軸としていることが明らかになった。

1941年から1960年まで、建築家が国民に住宅を与える立場のときは、西山は皆が持つ共通の概念からコミュニケーションを創出し、空間の設計をしていた。

1960年以降のまちづくりの提案に関しては、「構想計画」という共通の言語を提案（設計）し、批判（＝コミュニケーション）を通して、国民との討議を重ねてともに作り出す方法をとっている。

以上のように、時代や設計の対象が変わっても、西山はコミュニケーションを手法として提案をしている

ことが明らかとなった。

このように、一人の施主に対してではなく、常に国土的な視点で国民の生活を豊かにすることを追求しており、どんな人にもわかる「共通の言語」を建築でつくるという姿勢は、一人の建築家の域を超えており、その建築論は政策と類するところがある。

【注】

注1) 早川文夫「国民住宅の提唱」（『建築雑誌』、1940年）をはじめとして、当時「国民住宅」を提唱する声が方々に起こっており、「国民住宅」の懸賞設計競技もいくつか行われた。

注2) 第二次世界大戦中に日本の占領下で現業系労働に従事した外国人のこと。

注3) 白紙状態の意。

注4) 1963年においては現物保存しかできなかったが、1996年に法改正され、文化財の活用が認められた。

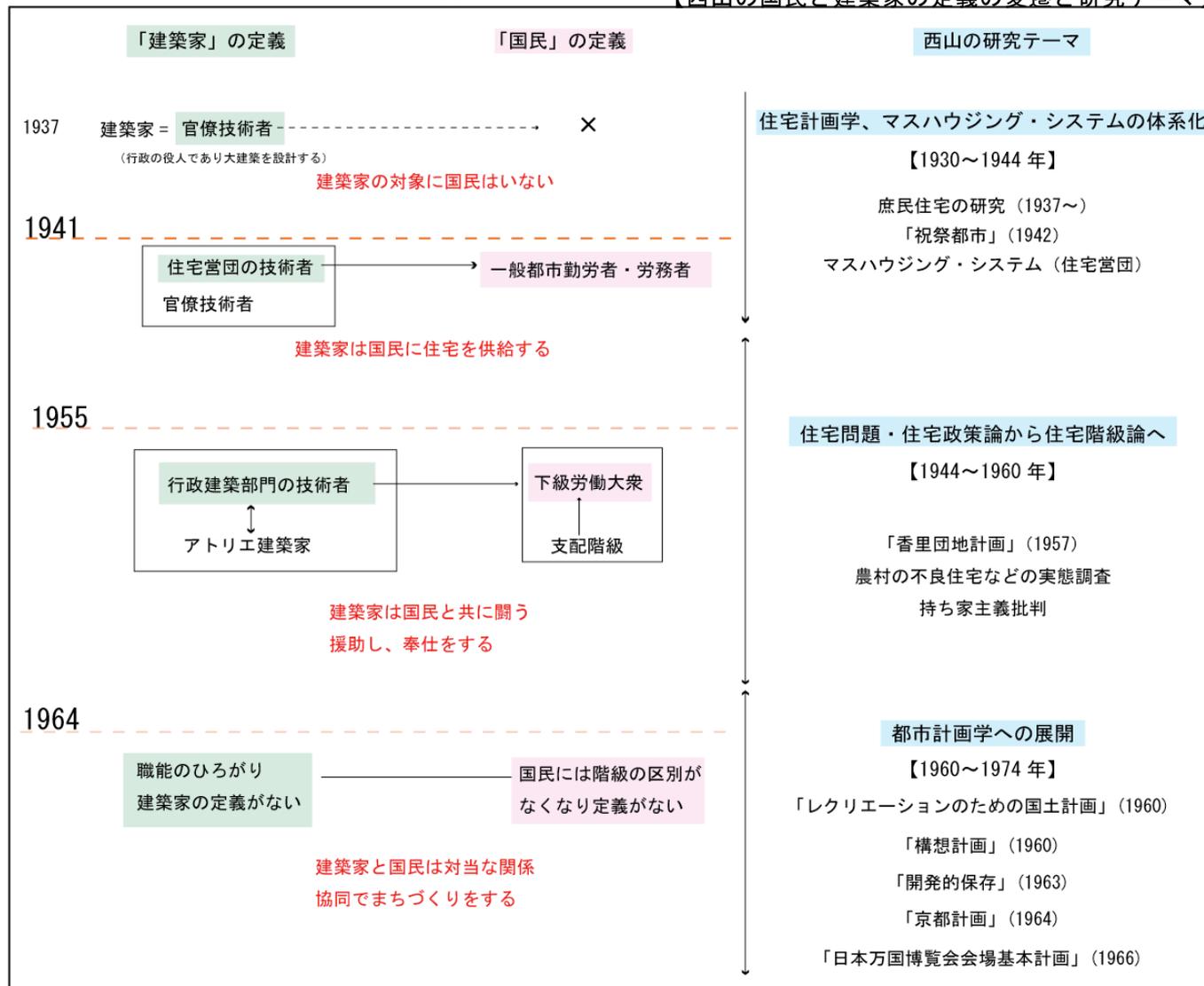
【参考文献】

¹ 日本建築学会編『日本近代建築発達史（下）』（文生書院、2001年）

¹ ケネス・ルオフ著、木村剛久訳『紀元二千六百年 消費と観光のナショナリズム』（朝日新聞出版、2010年）

¹ 石井一郎『国土計画』（鹿島出版会、1988年）

【西山の国民と建築家の定義の変遷と研究テーマ】



討議

討議 [徳尾野先生]

西山卯三と言えば、ハウジング理論を外すことは出来ないと思うが、全体像を把握するために、どうしてレクリエーションを選んだのか理由を教えて欲しい。

回答

本研究の目的は、西山卯三の「国民」と「建築」をつなぐ方法を明らかにすることにあります。ハウジング理論については外したという認識はありません。ハウジング理論単体でも西山の特異性を明らかにすることはできないと思いました。そこで、中心の空間構成にはなりません、ほぼ全ての提案に関わるレクリエーションというものに着眼することで、西山の全ての提案に通じる手法を明らかにできるのではないかと考えました。また、レクリエーションはもともと建築の分野から生じた領域ではありませんが、人間であれば誰でも享受できるものであり、国民皆に対して存在しているものであると思います。そこに西山の考え方と共通するものを感じ、レクリエーションに着眼しました。

その結果、ハウジング理論の説明もつくのではないかと思います。ハウジング理論は、建築を知らない国民であっても間取りや暮らし方を想像できるものです。そのように西山の型住宅は〈共通の言語〉としてコミュニケーションのツールとして、国民に提案されたと説明ができます。

討議 [嘉名先生]

西山卯三の全体像を見る時に、西山研究室や西山グループの総帥、プロデューサーとしての西山卯三の立場みたいなものが、私は結構重要だと思っています。万博なんかも西山さんが中心になってやったわけではなく、丹下研と同じように、それぞれの専門分野に番頭さんみたいな人がいて、それぞれがその分野をまわしていくわけです。で、あなたがおっしゃるように、確かに国民をみている、社会と向き合う部分が確かに西山さんにとっては重要で、ミーハーでもあり、先進的で次々と概念を生み出していく、新しいものに飛びついたがるというのが良さで、それがその番頭さん達をうまく引っ張っていくことになる。全体像は実はそれで、それを全部西山卯三がやったみたいなことを言うことに違和感がある。もう少しどういう体制でやったとか、どういった人達と一緒にやったとかそういう情報が入ってくると、西山卯三の全体像がみえるのではないかと思うが、どう思いますか。

回答

私も本研究を通して、プロデューサーとしての西山の顔は強く感じたところでした。レクリエーションと言えば三村浩史先生のように、西山卯三について調べるとそのお弟子筋の方々が後ろに垣間見えました。そのような方々のエッセンスというものはもちろん提案に反映されているとは思いますが、どのように反映されたかを考察するには時間が足りませんでした。今後の研究の課題としたいと思います。

討議 [吉田先生]

保存論のところで、レクリエーションから保存論へ展開させたという箇所がプロセスとしてわかりにくかった。ただ時代と共に変わっていったのか、それとも元々その基礎となる理論があったのか、どちらですか。そして、これは本当にこの時代、西山卯三だけの特徴か。他にも誰にもやっていないこととして認識しても良いか。

回答

一つ目の質問に関して、保存論への展開に関しては、ただ時代と共に変化したというわけではありません。西山は1960年の「レクリエーションのための国土計画」という論文を発表しますが、その中で論じられていることが後の保存論の基盤になっている論であると考えられます。

二つ目の質問に関して、1960年代多くの観光学者が観光資源と人文資源を大別する手法で論じてきたと指摘されており、西山の論には新規性があったということは既往研究で論じられています。この論が西山独自の特徴であり、他の人が主張していたかどうかは調べていません。